



競技かるた Kyogi Karuta

中明 育

Iku NAKAAKI

皆さんは、「競技かるた」をご存じだろうか？競技かるたとは、小倉百人一首を使って1対1で戦う競技である。暗記力などに加えて素早い体の動きも必要であることから、別名「畠の上の格闘技」とも呼ばれている。

現在、競技かるたを題材にしたテレビドラマが放送されており、主人公が高校のかるた部に入部し、部員とともに団体戦に挑む様子が描かれている。私は高校時代にかるた部に所属していたので、このドラマを観ていて、当時のことをたくさん思い出した。

私は小学校の百人一首大会がきっかけで百人一首を全部覚え、前述のドラマの原作の漫画を読んで競技かるたというものを知り、地元でかるたを習い始めたのだった。小学生から大学のかるたサークルに至るまでかるたをしてきたのだが、間違いなく一番楽しかったのは高校の時だった。

当時、富山県内唯一のかるた部がある高校に通っていた。一番の思い出は何といっても近江神宮で行われる高校選手権という団体戦である。かるたの甲子園みたいなものだ。私は2年生のときに団体戦のメンバーとして出場した。私の高校は、全国的にみてトップレベルの選手がいるわけでもなく、決して他高校からみて警戒されるような戦力ではなかった。しかし、この大会に向けて団体戦を想定して練習し、お互い声を掛け合って良い雰囲気で試合できるように仕上がってきていたので、勝ち進む自信があった。それに、団体戦は5組の個人戦を行って3組以上勝ったチームが勝ちとなり、誰と誰が対戦するかによって勝敗がかなり変わるために、そういった作戦面でも上手くいけばチャンスがあるとも思っていた。この対戦オーダーを予想するのも部員の役目で、自分たちで相手高校の情報を必死に集めた。試合の直前まで、相手の強い選手をどう避けるか、どの順番に誰が入るかをみんなで話し合った。決勝トーナメント進出をかけた試合は今でも鮮明に覚えている。私の高校はオーダーを的中させ、それでも簡単に勝てるわけではないのだが、勝ち上がると予想されていた高校を倒すことができた。あの日はいつも大会より集中して実力以上が発揮できたような気がする。最終的にはベスト4まで進出したのであつ

た。最後の三位決定戦は負けてしまったけれど、かるたの聖地である近江神宮の中でも一番格式高い浦安の間という会場で、強豪校と試合ができる、それもとても感動する景色だった。静かな緊張感、札を取ったときの快感、顧問の先生や仲間からの応援は忘れられない。

先輩が卒業して自分たちが引っ張っていく代になると、なかなか団体戦で調子が上がらないことも多かった。かるたはメンタルが整っていないと、暗記できなかったり、お手つきをしたりしてしまう。当時は自分が一勝しなければ、というプレッシャーを気づかないうちに感じていたのだと思う。最後の夏はあまり自分は勝てなかたが、高校としてはベスト8に入ることができた。悔しい思い出も多いが、負ける度に仲間に支えられて何とか気持ちを切り替えたり、自分が負けてもチームとして3勝できるようにサポートしたり、そうやっていろんな困難を乗り越えていった経験も含めて、高校時代の部活はとても楽しかったという記憶が残っている。冒頭で述べたかるたのドラマでも、他の高校を偵察してオーダー決めをしたり、オーダーが当たってもチームで一番強い選手が負けてしまったり、あるよね…！と思ってとても懐かしい気持ちになった。

高校時代が良き思い出となっているのは、素敵な部員たちに囲まれていたからもある。受験勉強と部活を両立するために、休みの日は部室に行って勉強してから練習することもあり、部員のみんなとはずっと一緒に過ごしていた。特に同期は、今でも集まって旅行に行くほど仲が良く、私にとってかけがえのない友達である。

社会人になり、かるたはもう辞める、と思っていたのだが、なんだかんだ機会があって年に1、2回ほどは練習に参加しているの。私が完全にかるたを辞めていないのは、今でもかるたが好きなのか、もっと上達したいという気持ちがまだあるのか、自分でもよく分からぬが、それだけかるたの魅力は奥深いものである。